
ミニ物語～夢路の国のアリス～

凧夜 流歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミニ物語〜夢路の国のアリス〜

【Nコード】

N2755T

【作者名】

凧夜 流歌

【あらすじ】

眠ると始まる物語。

毎日少しずつ進んでいくユメというゲンジツ。

始めの一步は眠る事から。

さあ冒険を始めよう

終わりの始まり

アリス

僕らのアリス

苦しく理不尽なその世界を

君が捨てたいと言うのなら

僕らはそれを手伝おう

辛い事も悲しい事も

全て捨ててしまつて

夢の世界に迎えてあげる

さあ、君の望む冒険の旅を・・・。

気付くと知らない場所にいた。

一面の野原。地平線のその先まで草が生えているだけで他に何もない。

上を見るとオレンジ色の空が広がっていて、雲は黄色く、わたあめみたいにフワフワしている。

目線を下に戻すと足元から真っ直ぐ伸びる道が出来ていた。

私は特に不思議に思うこともなく、道に沿って歩きはじめる。

ふと、道の先に人が立っているのが見えた。

男の子だ。

私は躊躇う事なくその男の子の前に立った。

「ずっと君を待っていた」

男の子が無表情に言う。

「さあ、アリス。白兔を追い掛けよう」

差し出された手を、私は。

目が覚めると、自分の部屋の見慣れた天井が目に入った。

「んー……。変な夢見たなあ」

伸びをして体を起こす。

私は新城 亜李咲。17歳。ごく一般的な女子高校生だ。

今日は休日で特に用事もない。

一日何しようかな……。

親は仕事が忙しくて夜にしか帰って来ないし、私には兄弟がいない。

家の中は静かで、自分の息の音しか聞こえない。

「やることもないし。寝るか。起きたら掃除でもしよ」

亜李咲は朝ご飯を簡単に食べると部屋に向かった。

終わりの始まり（後書き）

分かんとは思いますが、元になっているのは童話の不思議の国のアリスです。世界観は全然違うとは思いますがねwというより、知ってる人は知ってるかな、どちらかというと、世界観自体は携帯ゲームの歪みの国のアリスに似ているところが多いかもしれません。が、完璧に真似しているわけでも、ましてや真似しようとしているわけでもないです。

この作品はあくまで僕のオリジナルとして投稿させていただきます

^^

アリスと猫

気付くと、また野原に立っていた。

「あれ、またこの夢・・・」

空はオレンジに染まり、黄色い雲はふわふわと風に流されている。下を見るとやはり細く長い道が延びていた。

亜李咲はいつの間にか、どこかの童話で見たような赤いワンピースを着ていた。

しばらく歩いていたが、前の夢に出てきた男の子はいない。

そういえばあの人、よくよく思い出してみるとかつこよかった気がする。

歳は亜李咲と同じくらいか。

多分身長は180cmくらいだ。アリスは160cmなので見上げる形になっていたのを覚えてる。

その時は不思議に思わなかったが、男の子は、足まで隠れる丈の長い茶色いフードを着ていた。しかもフードに猫耳のような物が付いていた。

顔はかろうじて見えていたが、あれは・・・。

「人形みたいな顔だったような・・・」

「誰がだい？」

いきなり後ろから声が聞こえた。

びっくりして振り向くと、どこからわいたのか、夢で会った男の子が立っていた。

びっくりしすぎて声もでない。

「どうしたんだい？アリス。どこか痛いのかい？」

男の子は真顔で口を開く。

「い、痛くないよ！どこも痛くない！」

男の子の素っ頓狂な言葉に慌てて答えた亜李咲はたと気付いた。

「・・・アリス？」

「さあ、アリス。白兔を追い掛けよう。早くしないと逃げられてしまうよ」

猫耳フードを被ったままの頭を少し傾け、また無表情に言う。

「ちよっ、ちよっと待って！アリスって誰？」

男の子は確かに自分の事を『アリス』と言った。

亜李咲の発言に、男の子は、わからない、ともっと首を傾げる。

「何を言ってるんだい？アリスは君だよ」

「違うよ！私はあ・り・さ！ちよっと似てるけど、あなたの言うアリスじゃないわ」

「・・・」

男の子は少しの間思案するように亜李咲を見つめていたが、不意にコクツと頷き、言った。

「君はアリスだ。僕らが間違えるはずがない」

亜李咲はガクツと、足の力が抜けるような感覚を覚えた。

なんかこの人、疲れる。夢なのに。

「・・・そうだ。名前」

ふと思い出した。

自分はまだこの人の名前を聞いていない。

「あなた、名前なんていうの？」

「・・・名前？僕に名前はないよ」

「・・・そうなの？」

さらっと答えられたそれは、衝撃事実。

だが不思議と、名前がないということに疑問が沸かなかった。

・・・夢、だからかな・・・？

「僕に名前はない。だからアリスが好きに呼び」

「・・・」

好きに、と言われても・・・。

男の子を改めてまじまじと見てみる。

肌は透き通るように白く、髪は金髪のような茶髪。目は綺麗なスライブルーときた。

瞳を覗き込み、ふと気付いた。

あれ、繋ぎ合わせたような線がある。

これじゃまるで、人形ではなく、ロボット……。

アンドロイドっていうんだっけ？

「どうしたんだい？アリス」

男の子は己を見たまま黙りこくっているアリスを不思議に思ったのか、首を傾けた。

「あ、なんでもない」

そっか、アリス。これ夢なのよね？なら楽しむべきだわ。

アリスは一人納得すると、昔絵本で読んだ不思議の国のアリスを思い返してみた。

アリスは白兎を追いつけて穴に落ち、不思議の国を旅する。

そこでいろいろ口を出してくるのが……。

「チエシャー猫」

「ちえしやあねこ？」

初めて聞いたと言うように男の子が繰り返す。

「そう、チエシャー猫。不思議の国のアリスの登場人物の一人なのよ」

「ふしぎのくに？」

例の如く、また男の子は繰り返す。

アリスはにっこり笑って言った。

「あなたの名前はチエシャーで良いわね？」

「うん。良いよ」

本物のチエシャー猫は四六時中ニヤニヤ笑っているキャラだったはずだが、まあ猫耳付いてるし所詮夢の世界だしと、男の子に名前を付けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2755t/>

ミニ物語～夢路の国のアリス～

2011年10月6日14時15分発行